

中国情報

中国がいまや一つの歴史的時代の終りに近づきつつあり、「毛沢東以後」の時代へ向けての歴史的移行期にあることは、もはや誰の目にも明らかなどころで役割りを演じているか、ある。先の十全大会もこうした状況のもとで開かれたが、問題はこうしたアロセスのなかで、毛沢東自身などのようないいふべき個人の名前が大役割りを演じているか、にある。

十全大会では毛沢東はなにをしたかを確認して

一方、林彪批判の一環として個人崇拜、脅威に削除された。

こうした現象は、明らかに毛沢東個人の役割りを相対化しようとする潮流の流れを反映して、大会の基調報告でも改

正された党規約でも毛沢東個人の名が大、その基調スローガンの多くが「毛主席の各地巡回期間における各地責任者同志との談話録要」や「毛沢東の江青への書簡」など毛沢東の私的なもしくは非公開の談話から採られていることである(因みに党規約綱要は、こうしてすべてよいものであるかどうか、大いに疑問の残るところである)。

この点では、いかに毛沢東といえども、非公開の談話や表、宛てた私信のなかの一節

非毛化への周戦略

不自然な毛私信採用

中嶺鳩
おこう。九全大會では開会冒頭、「きわめて重要な演説をおこなつた」たり、大会の規約改正報告が、こうした毛沢東個人の名の削除にかんしてまったくなく、「毛私信」を採用され、これがもしかすると、實質的に「非毛化」をすすめつつ、目的的には毛沢東の言葉が党中央金の基調報告や党規約綱要のなかにそのまま採用されているとの不自然さをまず指摘すべしである。しかし、この

期間にても「重要な、人ひとの心をふるいたたせる演説をおこなつた」りした

(いずれも当時の新聞公報による)毛沢東であったが、今回、「代表たちに親しく手をふってあいさつした」十全大會

会新聞公報)にすぎなかつたよつた。つまり、毛私信を採用するのであって、修正是義をやまざきわめて象徴的な役割りしか演じなかつたのである。

も関連連する。

二つ目の力点は、毛沢東個人の名は削られながら、十全大会の基調スローガンである「三要三示要」の原則(「マル

・コマンド」であったことであり(八全大會の鄧小平報告はこの点を詳しく触れていた)、この事実は、前回のこの欄で掲載した毛沢東報告が言む深刻なナゾともいふべきである。しかしこれはもしかすると、實質的に「非毛化」をすすめつつ、目的的には毛沢東の言葉を重用して毛沢東の権威への挑戦と解されるリスクを避け、いすれの日にな、家長的立場の私物化を批判する際のため周到に配慮された周密な運営の大戦略の一環であるのかもしれない。

だとすれば、前回指摘したように、毛沢東にとってほ望ましくない内容を含む「五七一工程」紀要が今日、広く流布されている事実とそれは裏腹を成す」ともあるのである。

(東京外大助教授)